

ヤスクニ・レポ 223

日本の厳しい政治状況

—キング牧師に学ぶ—

代表 西川重則

1

戦後73年の2018年の厳しい政治状況、戦後71年の日本国憲法の施行(1947年5月3日)という歴史的な事実を思い、日本人として今後の責任課題を主権者・有権者としてどうあるべきかを真剣に考えている私である。

とくに戦後73年の今年、安倍首相がくり返し発言している2020年のオリンピックの行なわれる年には、自民党が憲法改正の年にしたいという事実上は憲法改悪の出来事を私は忘れることができないだけに、ひとりでも多くの人々と力を合わせて、憲法改正(改悪)反対の立場から力を結集し、憲法改悪反対の思いを単なる思いではなく、日本国憲法の「前文」、本文のすばらしい条文を生かして、戦争ではなく平和国家日本として、アジアの国々に対して長期にわたって行なわれた侵略・加害の歴史を二度とくり返さない日本をアジアを始め、世界の国々に示したいと心から願っていることを、改めて強調したい。主権者・有権者である私、特にキリスト者のひとりとして、マタイによる福音書5章9節の

「平和を創り出す人々は幸いである」とのイエス・キリストのすばらしい教えを実現したいと心から願っていることを述べておきたい。

ところで、そうした祈り・思いを心に抱いている私として、この際、私がずっと願っていることのすばらしい事例のひとつを以下報告したい。私の場合、今まで何度もアメリカに行き、教えられたこと、特に今年になって、日本の新聞やテレビで知らされたこと、私自身もずっと重要な事例として、この際、ここで知らせたい事例を述べて見たい。

それは、たとえばNHKが今年の4月8日(日)の午後6時に、「世界のいま 追い求めた“夢”は今キング牧師死去から50年」と題し、私が尊敬しているマーチン・ルーサー・キング牧師の生涯を報道

し、私たちに訴えられたことを真剣に私自身の課題として教えられたことを以下述べたい。

最初に、クリスチャン新聞(2002年2月9日)の第一面に、私の写真を含めての記事だが、私がアメリカに行き、アメリカでの学びについて、私の貴重な内容を報告してくれた記事である。次のような見出しであり、今改めて読み、私たちの課題として、キング牧師から学んで欲しいと願っている。

見出しは、「1・18ワシントン大集会 キング牧師の戦いを継承する人々『私には夢がある』」と大きな見出しである。クリスチャン新聞の記者が、最初に次のように書いて下さった。

「かつて非暴力によるベトナム反戦運動や公民権運動を展開したマーティン・ルーサー・キングJr牧師が名演説をした首都ワシントンDCでは、国民の記念日直前の週末の1月18日、イラク攻撃に反対するクリスチャン・市民による50万人の大集会が開かれた。現地の集会に参加した西川重則氏(「政教分離の会」事務局長)がレポートする。

2

以下私のクリスチャン新聞の一頁の報告である。「……集会の行動原理、それを貫く思想が、M・L・キングJr牧師の提唱していた非暴力直接行動にあることがわかった。集会場所も公民権運動の指導者キング牧師が63年8月『私には夢がある』という名演説をした場所であり、キング牧師の暗殺直後、追悼論文を執筆した私にとって心が燃えた。

予想どおり、参加者のプラカードの言葉の多くが、キング牧師の書物その他からのものだった。『沈黙が裏切られるときが来る』。『平和は単に私たちが求めている遠いゴール(目的)ではなく、そのゴールに到達するための手段である』。『暴力は永久平和をもたらさない』。こうしたプラカードを

持つ老若男女にまじって、『私には夢がある』というプラカードを持つお母さんが、かわいい子どもたちといっしょに立ちデモに参加している姿に、私は感動した。

ベトナム戦争を侵略戦争と呼び、教会の内外で信仰と良心に従って不屈の戦いを展開するただ中で暗殺された(68年)キング牧師の死は空しい死ではなく、その思想と行動とが戦争を知らない若い世代にも確実に継承されている光景を見、共に参加し、共に歩く私もまた、アメリカと日本の今を問う大きな責任と課題とを再確認し、主にあって今を生きる新たな希望を抱きつつ帰国した。

以上は私の一文であるが、私は「朝日新聞」の2018年の4月5日(木)の夕刊と4月6日(金)の朝刊に、キング牧師について、写真と長文のキング牧師の夢について報道されており、一読を勧めたいと思っているが、見出しを含めて、参考になる報道であることを痛感し、ぜひよく読んで欲しい。

4月5日(夕刊)には、「キング牧師の夢継ぐ暗殺から50年 全米で追悼」と見出しが書かれ、写真では、I AM A MAN(私は人間だ)と書かれた写真が、キング牧師の暗殺を追悼するアメリカ人の悲しみと責任を感じさせている。4月6日(金)の新聞の大きな見出しは、「キング牧師の夢 遠き現実 居住地・貧困・・・ 根強い人種差別

暗殺50年米で追悼」と書かれている。アメリカ人がいかにキング牧師の暗殺が心からの悲しい追悼の思いを抱かせているかがよくわかる報道となっている。

キング牧師が白人の男の凶弾に倒れたのは、39歳の時だった。場所はアメリカ南部のテネシー州メンフィスの公民権博物館、1968年4月4日午後6時1分であった。追悼は同じ6時1分、鐘は年齢の39回鳴らされた。暗殺された背景は、見出しの通り、「根強い人権差別」その他の理由からだった。見出しの通り、アメリカで、暴力や差別をなくしようと努力していたキング牧師のすばらしい信仰の戦いは、「暗殺50年」の2018年の今も「キング牧師の夢 遠い現実」と書かれる現状であって、私自身それはアメリカの現状と批判するだけでは無意味というほかない。

「朝日新聞」(2018年4月16日(月))の第一面に、「安倍内閣支持 低迷31% 本社世論調査 不支持52%」と大きな見出しで報道されているが、主権者・有権者の私たちの厳しい政治の状況をどう考え、どうすべきかについて、アメリカを批判するだけでは無意味であり、改めて私たちの課題をも、具体的に真剣に考え、実行したいと願っていることを述べて終りたい(2018年4月16日)。

2018年3月16日例会奨励「十四万四千人」

ヨハネの黙示録14章1～2節 星出卓也牧師 (日本長老教会西武柳沢キリスト教会)

「十四万四千人」という人数は、神の選びの民全体を象徴しているもの。イスラエル12部族や12使徒に代表される「12」という数をもって神が選ばれた主の民全体を象徴する。神の選びを現す12に12を掛けて、神の完全なる選びを現し、更にその数に10×10×10。全部を現す「10」を三度掛け合わせて、神の選びの民全員ということ。黙示録7:2-10もこのことを裏付ける。

そのメッセージは神に選ばれた主の民は一人として欠けることのないということ。様々な試練と苦難の中を通りながらも、主が選びだされた民は、一人として損なわれることがなく、一人として失われることもなかった、ということ。

この誰一人損なわれなかった民が、あの黙示録13章を通った同じ主の聖徒たちであると考え、その意味がより迫力を持つ。獣の聖徒たちへの迫害は地上の命を奪う程徹底し、獣の刻印を受けない者は、生活の術すらも奪われる非常に厳しい試練

である。このような迫害の現実の中で何人の人が残るのだろうか。一人でも主への信仰を貫き、獣への礼拝に屈しない人がいるであろうかと心配になる。その答えが「十四万四千人」なのである。主が御自身の民として選びだされた民は一人として信仰が損なわれず、永遠の命も失われない。エペソ1:4-5の通り、神の選びを地上の何かの変更したり無効にしたりすることはできないということ。

黙示録13章の困難に悩み呻く、弱き主の聖徒たちが、実は14:2では「大水の音のよう、激しい雷鳴のよう」とある通りに、獣の支配を恐れさせるものであった。聖徒たちの「小羊こそが主」という信仰の告白と生き方は、獣が主であり、サタンが主であると脅かした地上の支配をおののかせる「雷鳴のとどろきのよう」であった。だからこそサタンの聖徒たちへの攻撃も死に物狂いなのである。それにもまして勝利を収めるのは小羊であることを本日の箇所は明言をしているのである。